

2019年度特別支援学校と高等学校との交流及び共同学習実施事業

交流及び共同学習における取組例

県立龍野北高等学校

活動の実際（単元名）

障害のある生徒及び教育に対する理解と啓発(実習)

指導目標

障害のある人への理解と配慮を心がけるために、同世代の障害のある高校生と協同で作業をしながら共通の課題に取り組み、同世代の人間同士として相手を身近に感じられるようになる。

事前学習

交流及び共同学習実施前に、特別支援学校側から参加生徒の障害の特徴についてまとめた資料を提供してもらい、本校の参加生徒とのペアリングを事前に検討した。また、特別支援学校の担当教員から、本校生徒に対して、参加生徒の個々の障害の特徴、関わり方や声かけの方法に関するアドバイス等の事前説明をもらった。このことにより本校生徒の疑問と不安を事前に解消し、障害に対する理解を深め、有意義な交流となっている。

学習活動（具体的な取組）

1. 特別支援学校担当教員からの事前説明を受ける
2. 特別支援学校のスクールバスを出迎え
3. 開会式
4. 交流及び共同学習の活動
 - ・皮革の選択
 - ・作りたいデザインを皮革に写す
 - ・はさみ・ボンド等で協力して作品制作
 - ・作業が早く進んだ場合は、複数の作品を制作する
5. 閉会式
6. 特別支援学校のスクールバスを見送り

支援と留意点

- ・ペアとなる生徒の障害の特徴を理解し、接し方を学ぶ
- ・予め決めていたペアの生徒で出迎えて教室まで会話をしながら誘導する
- ・会話はじっくりと聞くようにする
- ・説明や指示は短く分かりやすい言葉で行うように心がける
- ・特別支援の生徒ができる作業は、手を出さずに見守り、作業をゆっくりと待つ
- ・困難な作業は、声掛けをして手伝う

評価

- ・生徒たちは、特別支援学校の生徒が言いたいことをじっくりと聞き、聞きづらいときは、指さしで確認したり近くの教師に尋ねて意思疎通を図る努力をしている様子が見られ、事前に行った個々の生徒への接し方のアドバイスを活かすことができた。
- ・作品の出来栄を重視するのではなく、できるだけ簡単な言葉での支援や、困難な作業のみの手助けを心がけ、特別支援学校の生徒が自分で制作できたという達成感を味わえるような支援ができた。

活動の様子



特別支援学校担当教員からの事前説明



作品制作（皮革の形取り）

事後学習

生徒各自がペアとなって交流した特別支援学校の生徒に対して、手紙を書き、交流学習が本校生徒にとっても楽しく、意義のある活動であったことを実感していた。特別支援学校の生徒が望んでいる支援と望んでいない支援を、相手とのコミュニケーションの中で感じ取ることが、交流及び共同学習をスムーズに行うためのポイントの一つであることを確認した。

成果と課題

特別支援学校の生徒には、知的障害があり、言葉での意思疎通は難しかったが、簡単なコミュニケーションは取れたので、身振り手振りを交えて作品づくりをすることにより、作業の当初の緊張が次第にほぐれ、本校生徒の声かけによってスムーズな作業が行えた。作業中もお互いに良い雰囲気を感じ取って心を通わすことができたと思われ、本校生徒から「今回交流することによって、作品が完成した時の喜びを再認識でき、ものづくりの大切さを感じるいい機会になった」との感想があった。また、今回の交流活動を通して、以前は重く感じていた「障害」を「こういうものなのか、普通の高校生と変わらないんだ。良い経験になった」といった感想を持つようになってきている。このことから、普段考えることのない「障害」について、短時間での“ふれあい”であるが、深く考えるきっかけとなったと思われる。